

## 祈りの原則 ④

□祈りに関する学び全体のテーマ

## 1. 祈りの原則

2. 祈りの3つのタイプ（個人的な祈り、集会での公けの祈り、終末論的な祈り）
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件（祈る主体である信者が持つべき条件）
6. 祈りの構成と内容（父なる神に、イエスの御名を通し、聖霊の助けにより祈る）
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□「祈りの原則」のアウトライン

1. 祈りとは
2. 祈りを象徴するもの
3. 祈る理由と目的
4. 祈りのすすめ
5. 祈りの約束

## 6. 祈りのアウトライン

7. 祈る場所
8. 祈る時
9. 祈るときの姿勢
10. 祈りの力と結果

□祈りのアウトライン

信者はどのように祈ればよいのでしょうか。

それを教えるためにイエスが語った箇所は、マタイ 6:7~13 とルカ 11:1~4 です。この中で、マタイ 6:9~13 は、「主の祈り」と呼ばれる部分です。伝統的に多くの教会において、毎週の礼拝の中で、「主の祈り」がそのまま唱えられます。

しかし、この箇所では、信者が何を祈るべきか、祈りの内容のカテゴリーを教えるために語られています。それを、式文のように唱えることは、本来の目的から逸れてしまいます。そればかりか、イエスが禁じたことである「同じことばを、ただくり返してはいけません」（マタイ 6:7）に当てはまってしまいます。

では、「主の祈り」の箇所を詳しく見てみましょう。

## 1. 祈りのアウトラインについて教える聖書箇所 2つ

(1) マタイ 6 : 7~13

(2) ルカ 11 : 1~4

## 2. この2つの聖書箇所からわかる原則・・・定型的な式文を唱えるのは、祈りではない

(1) マタイ 6 : 9 「こう」**ギ**フトゥ このような仕方

① 9節から13節にかけての「祈り」は、あらかじめ準備された定型的な祈りの式文ではない。そのような式文は、7節では次のように禁じられている。

「同じことばを、ただくり返してはいけません」

② 9節では、「これを祈りなさい」ではなく、「こう祈りなさい」・・・**ギ**フトゥ このような仕方祈りなさい、と、イエスは言った。

③ 9節から13節にかけての「祈り」は、ひとつの模範的な祈りのパターンである。これによって、祈りのアウトラインを教えるものである。

④ イエスは、この「祈り」を信者たちが一言一句同じことばで繰り返し唱えるために教えたのではないことは、7節の禁止、また9節の「こう祈りなさい」という命令に照らして明らかである。

(2) ルカ 11 : 1 「私たちに祈りを教えてください」

→直訳「教えてください、私たちに、祈ることを」・・・「祈り」と訳されている箇所は、名詞ではなく、動詞である。【式文のような祈りを教えてください】ではなく、【祈るという行為をどのようにしたらよいのか、それを教えてください】と、弟子たちはイエスに願った。

① 当時のユダヤ教の祈りは、式文のように、あらかじめ書かれていた。

② イエスの弟子たちも、そのようなあらかじめ書かれた、多くの祈りを読むことができたし、それらの祈りの中から、どのような時にどれを引用して祈ることばとするのか、そのことも、よくわきまえていた。

③ しかし弟子たちがイエスのそば近くで、イエスの祈り方を見ていると、イエスはあらかじめ書かれた祈りを唱えていたのではなかった。イエスは、その時その時に、神と語るようにして、祈っている。弟子たちは、そのような祈りをしたことがなかったし、どのように祈ればよいのかもわからなかった。

④ そこで彼らは、イエスにどのように祈ればよいのか、教えを求めたのである。

- ⑤ もし、ルカ 11：2～4の祈りが、そのまま唱えるべきものとして教えられたのであれば、弟子たちはそうしたはずである。ところが、その後の記録である「使徒の働き」の記事の中では、一度として祈られていない。使徒の働きも著者はルカである。ルカは、ルカの福音書を「前の書」と呼び、その続編として「使徒の働き」を書いた（使徒 1：1～2）。
- ⑥ また、使徒たちが書いた書簡（ペテロやヨハネ、そしてパウロなどによる書簡）の中でも、一度も祈られていない。それらの記事の中には多くの祈りが記録されているが、マタイ 6：9～13 やルカ 11：2～4の「祈り」をそのまま唱えている祈りは、一つもない。
- ⑦ 以上のことから、初代教会の信者たちは主の祈りを定型的に唱えることはしていなかった、ということがわかる。

### 3. この2つの聖書箇所からわかる、願い求めるべき内容

- (1) イエスは、祈りのアウトラインを教える中で、信者が祈りの中で願い求めるべきことを6つ挙げている。
- (2) そのうち3つは、神、そして神の栄光に関するもの。
- (3) そして3つは、人、そして人の必要についてである。

### 4. 祈りのアウトライン 6つのこと【神について3つ、人について3つ】

- (1) 誰に対して祈るのか・・・父なる神に対して、である。そのとき、信者はどのような立場で祈るのか。「私たちの父よ」とあるように、信者は祈るときに、常に、自分ひとりで神の前に立つのではなく、キリストを頭とする教会の一員、キリストのからだに属するひとりとして、神の前に立つのである。そして、「父よ」と呼びかけるとき、自分が天の父との交わりを保っているかを確認する。

- ① マタイ 6：9「私たちの父よ、天におられる」、ルカ 11：2「父よ」
- ② 神の御子、あるいは聖霊に対して信者が祈るべきとする根拠は全くない。すべての祈りは、父なる神に対して祈らなければならない。
- ③ ルカ 11：2では「父よ」とだけあって、マタイ 6：9のように「私たちの父よ」とは言っていない。しかし、ルカ 11：3～4では、祈る側を指すときはすべて「私たち」と記されている。祈る側は、複数形の「私たち」である。

信者は祈るとき、常に自分ひとりの資格で神の前に立つのではなく、キリストを頭とする教会の一員、キリストのからだに属するひとりとして祈る。

- ④ 祈りを起動させるのは、「私たちの父」への呼びかけである。ここで覚えておかなければならないことは、「私たちが父なる神との交わりの中にあるならば、私たちは父なる神に近づくことができる」、ということである。もし父なる神との交わりを持っていないなら、近づくことはできない。
- 「もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」(1ヨハネ1:7)
    - 神の前にありのままの自分を差し出す、それが光の中を歩むということ。清く正しい行いをしていくことではない。
  - 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(1ヨハネ1:9)
    - 言い表すとは、ある事柄について同意すること、その通りですと賛成すること → 神のことばに同意し、神が罪とされることを罪であると認め、自分がその罪を犯したことを神の前に言い表す=神の前に祈る
    - すると、神はその罪を赦し、さらに、すべての悪からその人をきよめてくださる=その人が気づいていない罪も赦してくださる
    - この赦しは、救いの赦しではなく、神の家族としての関係を回復するための赦しである。
- ⑤ 祈りの最初に「私たちの父よ」と呼びかけるのは、ただの決まり文句ではない。神の家族としての関係を保つための赦しを受けているかどうかの確認。
- 私たちは父なる神との間で家族的な(父と子たちの)関係を持っている。
  - それをベースに、子たち同士(信者同士)の間でも家族的な関係にある。
  - この大切な二つのことを念頭に置きつつ、「私たちの父よ」と呼びかけるとき、祈っている信者のすぐ近くに父なる神がおられる。そのとき、私たちは、霊的には、神の御前にいるのである。
- (2) 神を聖別する(神をこの世とは別に取り分けること、神を神としてあがめること)
- ① マタイ6:9「御名があがめられますように、」ルカ11:2「御名があがめられますように」
  - ② 旧約聖書では「ヤハウエ」をはじめとして、神のいろいろなお名前がある。それらは、すべて神の御性質に由来する。神の御性質は、神が神であられることを意味する。御名を聖別するとは、神を神としてあがめることである。この世のものといっしょにしてはならない。

- ③ 祈りのアウトラインの中で、ここでは、私たちが神の御性質について思いを巡らせるところである。
- そしてさらに、自分たち自身が神の御性質とどのような関係にあるかについても思いが向かうとき、祈りはさらに深まる。
  - どのような関係にあるかと言うと、信者は聖化によって神のかたちを回復していく。そして被造物でありながら、神の御性質と栄光を、神とシェアさせていただくように定められている。

(3) 神の国のプログラムに関して

- ① マタイ 6 : 10 「御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように」、ルカ 11 : 2 「御国が来ますように」
- ② 祈りの中で、ここでは、神の目的が歴史の中で成就し、完成されるように、と祈るところである。したがって、その内容は・・・
- 他の人々の救いについて
  - イスラエルの民族的救いについて
  - 「主イエスよ、来てください」(黙 22:20) → 教会の携挙について、そしてメシアの再臨について

---

(4) 個人的な願いに関して

- ① マタイ 6 : 11 「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」、ルカ 11 : 3 「私たちの日ごとの糧を毎日お与えください」
- ② 祈りの中で、ここでは、私たちの日々の必要が満たされるように祈る。個人的な必要、とくに目の前の必要について祈る。食費、家賃、住宅ローン、その他、何でも、個人的な支払いに窮することのないように祈る。

(5) 罪の赦しに関して

- ① マタイ 6 : 12 「私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」、ルカ 11 : 4 「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します」
- ② 負いめとは、この箇所では、モーセの律法に照らしての違反に関係する。十字架以降、モーセの律法は終了したが、新約時代の信者たちはキリストの律法のもとにある。
- ③ キリストの律法のもとでも、信者が罪を犯すと、信者は神に対して、負いめ、債務を負うことになる。その債務を支払う方法はひとつである。自分の罪を神の前に言い表すことによってその債務は免除される (Iヨハ 1 : 9)。

- ④ この債務免除、罪の赦しは、救いを受けるときの赦しではない。神との交わりを回復するために信者が受ける赦し、神の家族の関係を保つための赦しである。そしてこの赦しを受けるためには、もうひとつ条件がある。それは、他人を赦すことである。兄弟を赦すことが先にあって、その次に、神との交わりを回復する赦しを受けることができる。
- ⑤ まとめ：自分の罪を神の前に言い表すこと、そして、兄弟を赦すこと、この二つを前提にして、信者は自分のすべての罪を赦され、神との交わりを回復することができる。

(6) 霊的な戦いに関して

- ① マタイ 6 : 13 「私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください」、ルカ 11 : 4 「私たちが試みに会わせないでください」
- ② 試みに会わせない・・・マタイ 26 : 41 「誘惑に陥らないように」で使われている用語とほぼ同じ。誘惑に陥らないとは、誘惑には会うけれど、誘惑に屈することはない、ということ。
- ③ 「試みに会わせないで」という日本語訳では、試練からいつも自分たちを遠ざけておいてくださいという請願になってしまう。この箇所は、試練や誘惑に屈することのないように、との願いである。
- ④ これは、次の二つの願いである
  - 一般的には・・・悪から自分たちを守ってください
  - 特には・・・悪しき者（悪魔）から自分たちを守ってください
- ⑤ マタイ 26 : 41 「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい」→ 私たちが誘惑に陥らないように、目を覚まして祈ることは、私たちの義務である。